

99

『単一民族神話の起源』

小熊英二 新曜社

単一民族神話論の空虚さ

民衆の心情はさまざま「神話」を生む。日本民族は単一民族というのもその一つである。たとえば三島由紀夫は『文化防衛論』で、「日本は世界にも稀な単一民族単一言語の国であり、言語と文化伝統を共有するわが民族は、太古から政治的統一をなしとげており、われわれの文化の連続性は、民族と国との非分離にかかっている」と強調した。こうした主張は石原慎太郎や櫻井よしこらにも受け継がれているが、小熊はこの本で、戦争中の彼らの先輩が混合民族説に立っていたことを指摘し、その盲点を突いた。

岸信介の師である東京帝国大学教授の上杉慎吉など、次のようにまで主張したのである。すなわち、民族とは構成員の主観の産物であり、「人種の同一に非ず、言語の同一に非ず……各人相互に

同胞兄弟なり同一民族なりとの信念感情に基づく」と。そして日本も、太古には「天孫民族あり、出雲民族あり、其の他先住諸民族あり、又は皇別神別蕃別ありしも、皆一家の如く、同胞兄弟たるの感情意識信念を一にして離るべからざる一体を成した」のであり、有力民族は他民族を「一大民族の坩堝るぼほ中に融解」してしまうという。

こうした混合民族論が展開されたのは、満州国の「五族協和」（日本、朝鮮、漢、満州、蒙古の五族が協和する）を実現するためには、日本民族が他民族と融和する混合民族でなければならないからだった。

その熱心な主唱者の石原莞爾が師事した田中智学は、天孫民族が多くの「土着民族」や渡来人を同化したことから、日本民族は「世界中のあらゆる民族」を統一同化する使命を帯びた「世界的大優勝民族」だと持ち上げている。

しかし、それは戦後の三島や石原の論とは違って、単一民族としての優秀さではなく、むしろ同化する優秀さの主張である。優秀さの主張は同じでも、その論拠は正反対なのである。

上杉慎吉と同じ国体論の哲学者、井上哲次郎も、人類学の学説を引きながら、こう断言した。「日本人は混合民族」であり、太古の列島にはアイヌ系、南方系、朝鮮系、ネグリートや多くの渡来人がいたが、「天孫に依ってスツカリ統一されて……皆悉く一つに同化されて」しまった。

同化されてしまう者がそれを喜ぶかどうかを問わぬ、まことに身勝手な同化論だが、彼らは明らかに日本民族は混合民族だと強調している。石原の「三国人」発言など、彼らから見れば、とんで

もないのである。

一九九五年に新曜社より出版される。他の著書に九八年「日本人」の境界、「二〇〇〇年」インド日記（いずれも新曜社）など。

100

『思想のドラマトウルギー』 林達夫・久野収 平凡社

目がくらむほどの博覧強記

『毎日新聞』に「わたしの古典」という欄があった。新しい古典を推す企画だったが、一九九一年二月二十五日付のそれで、私はこの本を挙げ、次のように書いた。

「この本を読むのはこれで五度目である。一九七四年に出たこの本を最初に読んだ時は、目のくらむ思いがした。

「閑談」という形をとりながら、映画、演劇、音楽と、二人の話は縦横にとぶ。「専門」とも

言える哲学、思想の分野では、古今東西の「人と作品」が出てきて、その博覧強記に圧倒された。読み終えた時は、口もきけない感じだった。

というのも、私は慶応の学生時代に学習院で教えていた久野先生の講義を「盗聴」に行つて以来、先生の「人と思想」にはずいぶんと触れて「わかった」つもりでいたからである。ガーンと頭を殴られたような思いだった。すぐに再読、三読し、四度目に読んだのは十年前である。一九一〇年生まれの先生と、ほぼひとまわり上の「林さん」との対談は、決してむずかしいことばかり話しているわけではない。もちろん、「尊皇思想の強さのように見えるものが、ある意味ではその弱さの裏返し」であり、「天皇制とは何かに対する警戒と恐怖の前もつてする一種の予防体制で、その何かの方がかえって正統派なんだ」といった厳しい指摘もあるが、「永年の教師商売が僕をこんな精神硬直症にしまつている」と嘆く故林達夫と先生の対話は、その反省に反して、実にみずみずしく、ヴィヴィッドな示唆に富んでいる。それが貧血的でないのは、何よりも二人が「俗」への関心を失わないジャーナリストだからだろう。

クルト・リースの『フルトヴェングラー』やアナトール・フランスの『聖母の軽業師』など、興味深い「必読書」を教えられる一方で、私は「林さん」のメロドラマを馬鹿にするなという話に、「そうだ、そうだ」と強く膝を叩いていた。「この頃は、ドライとかクールばかりで、特に高級インテリは嵩にかかつて非難したり、それにそっぽを向くかもしれないが」、お涙頂戴的演劇や映画を軽く否定的にだけ考えていると、「人間の精神のバランスを崩して、あとでひ